解説

野中 葉

ヘルフィ・ティアナ・ロサ（Helvy Tiana Rosa, 一九七〇年―）は、インドネシアの著名な現代女性作家である。彼女の作品ジャンルは、小説、短編小説、戯曲本、詩、エッセイと幅広く、数多くの作品を手掛けているが、一貫して、その作品にイスラーム的価値を含むことに特徴がある。

一九九〇年代初頭、インドネシア大学文学部に在学中に、ヘルフィは同大学の学生イスラーム組織に参加し活動する一方、小説を書くことで、また文芸の活動に関わることで、自らの能力を活かしたダアワを実践し始めた（ダアワとは、イスラームへの呼びかけ、宣教を意味するが、異教徒に対する宣教だけでなく、同胞のイスラーム教徒に対し、イスラームのより良い信仰と実践を促す行為も含まれる）。ヘルフィのダアワの一番のターゲットは、自分と同年代の若いムスリマたちだった。一九九〇年に若い女性を主な読者層とするイスラーム短編小説雑誌の『アニーダ（Annida）』（アラビア語で「呼びかけ」を意味する「アル＝ニダー」に由来する）を創刊し、八年にわたり編集長を務めると共に、自らも作品を次々と執筆して掲載した。イスラーム式のヴェール着用者がインドネシアでは、依然、圧倒的なマイノリティだった当時、ヘルフィの作品は、イスラームに目覚め、先駆的にヴェールを着用し始めた若い女性たちを勇気づけた。この時期のヘルフィの作品には、読者である若い女性たちが感情移入できる等身大のムスリマ像を描くものが大変に多かった。また、一九九七年には、実妹でヘルフィと同じく著名なイスラーム作家のアスマ・ナディアや他のメンバーと共に作家・出版者・読者をつなぐコミュニティ「ペンの輪のフォーラム」を創設、後に続く若い作家たちを育て、また、インドネシア社会におけるイスラーム小説や短編小説の発展に大いに寄与した。

「自分の能力を活かしてダアワを実践することは、ムスリム一人一人に課された義務。私は書くという能力を与えられた。だから、小説を書くことでダアワを行っている」「私が書くのは、インドネシアをより良く導くため」と彼女は言って憚らない。ムスリム社会に対する、またインドネシアに対する熱い思いが、作品にも溢れている。

訳出した「赤い網（Jaring-Jaring Merah）」は、ヘルフィの短編小説集『霧の男と人形（*Lelaki Kabut dan Boneka*）』（二〇〇二年）に収録された作品である。ヘルフィの短編小説には、等身大の若いムスリマの成長や葛藤を描くものの他、インドネシアの、また世界各地の紛争地域に暮らす人々、特に女性たちの苦悩を描き、読者の目を向けさせるものもある。「赤い網」では、インドネシアの西端のアチェを舞台に、虐げられた若い女性を描いた。この作品は、インドネシアの権威ある文学誌『ホリソン（Horison, 地平線）』によって、一九九〇年から二〇〇〇年の十年間に発表された作品の中で最も優れた短編小説の一つとして選出され、高い評価を得た。また、英語にも訳され、出版されている。

インドネシアが長期権威主義体制下にあった二十世紀後半、アチェでは、独立運動が激化し、自由アチェ運動（ＧＡＭ）が組織され、活動を展開するようになった。活動に対し中央政府は、武力による弾圧で活動を鎮静化しようと試みた。一九八九年には、ＧＡＭの活動地域である北海岸沿いの三県（ピディ、北アチェ、東アチェ）を軍事作戦地域（ＤＯＭ）に指定し、国軍の特殊部隊を動員して、鎮圧に乗り出した。物語のタイトル「赤い網」は一九九〇年初頭から一九九八年にかけ、国軍がアチェで展開した

軍事作戦の呼び名である。国軍特殊部隊によるこの作戦では、運動家やその支援者、また巻き添えを食った一般の市民たちに対する殺戮、暴力、人権侵害が多発したことが知られている。

物語は、国軍と独立派との抗争に巻き込まれて、家族や婚約者を殺され、自らも暴行を受けて独りぼっちになった少女イノンが主人公である。アチェは、インドネシアの中でもイスラーム色が強い地域であり、イノンも敬虔なイスラーム教徒の家庭の娘だったことが描かれている。イオンの家族にＧＡＭのメンバーはいない。父はムアッズィン（礼拝の刻を告げ知らせる者）であり、地域で認知されたイスラーム教徒の家族だった。にも拘わらず、ＧＡＭのメンバーを支援していたという嫌疑をかけられ、国軍の標的になった。イオンの婚約者ハムザも、村長ハルンも、イノンの家族を擁護しただけで、彼らと共に殺されてしまう。この悲劇から四年が経過した後も、イノンはそのトラウマに苦しんでいる。物語のタイトルの「赤い網」は、国軍の軍事作戦名であると共に、イノンの心をいまだに縛るトラウマのメタファーでもある。自らを苦しめるトラウマに対峙し、自らを縛るこの「網」から自由になるために、イノンは翼を求め、鳥になることを想像するのである。

イノンを支援する若い女性活動家チュット・ディニもまた、白いヴェールを身に着け、クルアーンを朗誦したり、日々の礼拝を実践したりする姿が描かれ、敬虔なムスリマだということが示唆されている。そして、イノンのもとを訪れ、イノンへの口封じのために五〇万ルピアを提示する国軍関係者と思われる二人の男性と、このチュット・ディニのやり取りによって、国軍が罪のない住民たちに対して組織的な暴力を行っていたこと、またそれを組織的に隠ぺいしようとしている状況が、あざやかに描かれている。家族を殺され、自らも暴行を受けたトラウマに長期にわたり苦しむイノンの絶望の描写と相俟って、スハルト政権や国軍の組織的な非情さや卑劣さに対する作者ヘルフィの強い抗議が感じ取れる。一方で、敬虔なムスリマ活動家チュット・ディニとの交流によってイノンの心が多少なりとも癒されていく描写には、ヘルフィの微かな希望と祈りが込められている。